

京大生フラダンサー目指してハワイ留学



法学部 2年
河野 有妃子
アメリカ
2017年2月20日～
2017年3月14日

渡航概要と内容

そもそもの目的はフラダンサーを目指して、クムフラ・カレオトリニダッドの下でフラを習うということであった。(クムフラとはフラの先生であり、我々は忠誠を誓ってその人の下でフラの教えや踊りを学ぶ。クムをトップとして構成されるそのグループをハラウという。)しかしその旨を連絡差し上げたところ、返ってきた返事は「フラはそんな(短期間で、教えてとって教えられるような)簡単なものではない」というもの。要するに、日本人が、少しの間訪れて勉学の傍らにやれるような、そんな簡単なものではない、と門を閉じられたのだ。かなりショックであり絶望しかけたが、自分のフラに対する浅はかさを恥じるとともに、伝統の厳しさを目の当たりにし、フラを文化として捉え、「ハワイ文化としてのフラ」を知ろうと考えた。

その研究対象は、①フラそのものを学び、自分自身が踊ることを経験する、②フラの曲で踊られる場所を訪れ、フラが踊られるようになった伝統を知る、③現在のハワイにおけるフラの立ち位置、存在意義を知る、④フラが日本で愛される理由、ハワイの発信力について探る

と設定した。これらのために具体的にとったアプローチの概要は以下のようになる。

①フラそのものを学び、自分自身が踊ることを経験する

●フラのレッスン…本来はハラウに属し、クムに忠誠を誓ってその下でフラを学ぶのであるが、ハラウに属さなくても、カルチャーとしてフラを学ぶことができる環境があった。そこで一回一曲を学ぶというレッスンを受けた。はじめにやる曲で歌われるハワイ語の意味を理解し、その次に振りを教わり、繰り返し練習して一曲踊れるようになる、というレッスンだった。ハラウにはそれぞれのクム(先生)の考え方があり、観光客やハラウに属さ

ないよそ者でも、一緒にフラを踊りましょう、というところもあると知った。それを利用し私が参加したハラウは、大会に出ることなどは考えず、入りたいならハラウに入ってもいいよ、というオープンな組織だった。渡航前、私の支持するクムには拒否され、伝統の厳しさを実感していただけあって、逆にカルチャーショックだった。他のハラウの教えを受けるとは積極的に許されることではないが、研究として参加した。お世話になったクムにフラを踊るうえで何を最も大切としているかと尋ねたところ、「Share the culture」と返ってきた。

●現地ハラウの見学…前述の“対外向けのレッスン”ではなく、地元に着したハラウによる地元の人々のレッスンに参加できることを知り、滞在していたオアフ島からハワイ島に渡った。ハワイ島には初めて訪れたが、ホノルルとは違って大自然が広がり、衝撃であった。そこでのフラのレッスンでは、地元の人々が伝統のルールを守りながらフラを受け継いでいることがうかがえた。本来は練習に参加できる予定であったが、残念ながらイベント前のリハーサルとしての練習をするため、練習には参加できず、見学だけ許可していただけた。ダンサーたちは一人ひとりクムに挨拶しに行き、ハグをし、会話をし、クムを心から尊敬し愛する様子がうかがえた。カヒコ（古典フラ）の練習の様子を見学した。練習に入る前に、oliと呼ばれるチャントが約15分ほど行われた。これはルーティンであり、祈りを捧げているものであった。クムの歌に合わせて皆が真剣に練習している姿にフラへの情熱と感謝、尊敬する心さえ感じ、圧倒されたし、心から感動し思わず涙が出た。そのクムにフラを踊るうえで、何が最も大切なのか尋ねたところ、「Share compassion.」と返ってきた。ここでも「share」という言葉を聞き、「共有する、共感する」ということがフラを踊るうえで、ハラウの枠を超えて共通して受け継がれていることだと考えられた。

●各ハラウの研究

滞在したホノルルでは観光客向けにフラステージが毎日のようにどこかしらで開かれる。できる限り見に行き、そのダンサーのレベルを見極め、ステージの後、ダンサーにフラ歴と練習の頻度を尋ね現在ほどのような形で地元の人々にフラが踊られているのかを調査した。大会前でない普段の練習は週1回程度が多く、（私が想像していたよりも）習い事的に習われているということなどが分かった。

●モアナ・サーフライダーでフラダンサーとしてのソロフラステージ

とにかく出会いを大切にして生活していた滞在中で、ホテルで演奏しているミュージシャン、ブラッドカワカミと出会い、その人に滞在目的等を伝えたところ、お声をかけていただいてワイキキの一流ホテル、モアナサーフライダーで、フラステージに立つことが



できた。ワイキキビーチに面する、ホテルのビーチレストランで観光客が音楽とサンセットと食事を楽しむ中、私はフラダンサーとしてステージでフラを踊り、観客は私の踊りにチップを差し出した。フラダンサーとはそのようにショーに出る者だけをさすわけではないが、やはり自分の踊りで人々が笑顔になるというのは私がフラを愛する最大の原因であり、この上ない喜びを得られると同時に、この渡航の中で自分にとって最も大きな経験となった。



②フラが踊られるようになった伝統を知る

●フラの曲で踊られる地を訪ねる

踊りで表現し始めたフラダンサーの気持ちを共有するため、フラの曲でしばしば踊られる地を訪ねた。ダイヤモンドヘッド、ハレイワ、マノア、ワイコロアなどが挙げられる。一つ一つの印象や曲調との関連性については詳細を省くが、「マノアで降る雨」にまで固有名詞がつけられ踊りで表現されていることなども考慮すると、逆らえない自然の脅威と、美しさへの敬意をこめて踊っていることが想像できた。訪問したのちはフラを踊る際、美しく踊ることを意識するのではなく、「歌詞の意味を考え、それを伝えるためのツールとしての踊り」としてフラを踊るようになった。

●Bishop Museum、イオラニ宮殿の見学

歴史を文献、遺産の面から調査した。フラが伝統として脈々と受け継がれてきたわけではないこと、ハワイがアメリカでなかった時代には欧米化に対抗するため、政策的に王室がハワイ文化としてフラを推奨していた時期があり、それを経てフラが受け継がれているという歴史。チャントで祈っていることはクムの生涯の行いや出来事を思い起こすもの、またある場所の美しさであること、また踊るときに身に着けるもの（草花、鳥の羽、動物の骨など）の意味など文化面、歴史面で様々なことを学んだ。

③現在のハワイにおけるフラの立ち位置、存在意義を知る

●元フラダンサーへのインタビュー

フラの世界大会であるメリーモナークの出場経験を持ち、現在は様々なメディア、講演会を通して日本にハワイの文化を伝えていらっしゃる吉見大介さんに、企画書を提出してアポを取り、インタビューさせていただいた。現地ハラウに属しフラダンサーとして活躍した経験、今ハワイに住んでいるからこそ感じられる今の人々にとってのフラの存在意義など様々なことを伺い、議論できた。（その時の様子を大介さんが日本で販売されているフラ雑誌、『Hula lea』のブログに載せてくださった。

<http://www.hulalea.com/diary/hula/blog.php?bn=2>)

●フラの国際大会 Moku o Keawe の見学

ハワイ島ワイコロアでフラの国際大会が行われ、鑑賞しに島を渡った。「フラダンサー」とは多義語であり、フラを踊る人、フラを踊ることを生業としている人、フラの大会に出ている人、などである。その中でも数えきれないほどのいろいろなフラダンサーを見てきたが、大会に出る、“勝つためのフラ”というのは初めて見た。楽しむだけではない、競技としてのフラは、とにかく見るものを圧巻させる力があり、美しさだけで終わらせない力強さとハラウの情熱があった。またこの国際大会には日本人チームも参加しており、直接的にハワイのフラと日本のフラ（私が今まで経験してきたそのものである）を比較する機会となった。

●Ho' olaule'a (Kamehameha School の学園祭)に参加

ハワイアンの血を持つ人のみが入学を許され、多くのクムを輩出しているカメハメハスクールを訪れた。学校ということもあり、本来なら学校に立ち入ること、ましてや通学する学生の様子を伺うことはできないのであるが、対外向けの学校行事ということもあり、参加できた。私の支持するクム・カレオトリニダッドもこの学校の出身であり、現在もここで先生をしている。所謂出し物ではフラ披露していたり、ムームー（ハワイの正装）を着て合唱をしていたり、ハクやレイを販売しており女子学生はそれをおしゃれとして身に付けていたり、“ハワイの若者にとってのハワイ文化”を感じられた。例えば日本の若者にとっての日本文化と比べて、ハワイの若者にとってはより身近であり、さらにかっこいいものとして誇りに思っていることが分かった。

④フラが日本で愛される理由、ハワイの発信力について探る

●徳重玲子さんへのインタビュー・ラジオ番組収録への参加

テレビ、ラジオ、イベントなど様々な媒体を通してハワイを日本に伝える活動をしていらっしゃる徳重玲子さんに企画書を提出しアポをとってインタビューをした。日本ではハワイは有名かつ定番の観光地であり、またフラも多くの人に愛され踊られている。それはフラやハワイそのものの魅力によるのはもちろんであるが、ハワイから日本への発信力の強さも大きく起因していると考えられた。その第一線で働く玲子さんに取材をし、またラジオ収録を見学、さらには自分自身もゲストとして収録に参加するなどした。



●浜松中学校の海外研修事業における「ハワイで活躍する日本人」としての行事参加
滞在中浜松中学校の生徒が、海外研修としてホノルルを訪れ、ハワイで活躍する日本人との交流を通じて国際的視座を持つことを目指す行事が行われた。はじめは見学させていた

だくのみでの予定であったが、講師30人のうち一人が欠席してしまい、代打として私が参加することになった。京都大学の学生であり、このような目的をもってホノルルに三週間滞在している、ということをお伝えしたうえで、それまでに学んだフラの伝統について、アウトプットする機会となった。

他にも、ホノルルフェスティバルのボランティア参加を通じた現地の人々や日系ハワイアンとの交流などを体験した。すべてを記載できておらず、それぞれ詳細を省いているが、フラダンサーを目指す上で学ぶべきこと、知るべきこと、経験すべきことはできる限りにおいてやり尽くしたと思う。

渡航を通じて感じたこと

フラに関して強く感じたことは以下の3つである。

①フラダンサーの定義について

②フラがハワイで愛され、踊られている理由

③フラが日本でも愛され、踊られている理由

①私はフラダンサーを目指して渡航してきたが、その夢は門を閉じられることによって渡航前に敗れた。しかし現地で感じたのは「私はすでにフラダンサーなのだ」ということである。ハワイではフラダンサーはフラをショーとして“魅せる”職業としての人ではなく、フラを愛し、敬意を持ち、見ている人や共に踊る人と「share」することのできる人であると感じた。よって私は「京大生フラダンサー」なのである。

②フラはハワイでは「伝統文化」としてではなく「日常」として存在しているということを感じた。日本人にとっての味噌汁のようなものである。そしてそれは音楽との関連性が高いということ。ハワイアンソングは現在も生き続ける確立したジャンルの音楽であり、ゆえに進化し続けている。(現在はラップとハワイアンソングがコラボした音楽もあったり、ハワイアン音楽番組なども存在した。)音楽が進化し続け、生まれ変わり続けるからこそ、フラも生き続けていると感じられた。

③ハワイの人々の生活に日本人と似ている部分を感じるがよくあった。先祖を大切にす文化、海と共存すること、地域コミュニティの重要性、それに基づく文化の形成など、距離は離れているが、私たち日本人の先祖と共通する部分が多く存在しているのではなかろうかと感じられた。実際にどこまでそれが当てはまるかは調査できていないが、その遺伝子レベルでのハワイの人との類似性が日本人のハワイへの親近感を生んでいるのではなかろうかと感じられた。

また、フラに関してだけではなく、この渡航を通して得た学びは数えきれないほどある。まず私の場合、そもそもの渡航の予定があってその奨学金を援助してもらうという形ではなく、とにかく「やりたい」という気持ちをどのように形にするかという事から始まっ

た。そしてクムに連絡差し上げた段階では拒否されてしまったため、ハワイには一人も知り合いはおらず、行く当てもなく、要するに「何も想像できない空白の3週間と奨学金」だけが与えられることとなった。そのような状況で「フラダンサーになるにはどうしたらよいか？」と問い続ける中で、とにかく自ら足を運び、発言し、アクションを起こすことで、一つ一つが連鎖し可能性とチャンスが広がることを実感することができた。そして結果的に、一日も無駄にすることなく、人との出会いにあふれた、夢に向かって奮闘できる充実した3週間を過ごすことができた。というより充実した3週間を“作り出した”と言える。この渡航では特に出会いの大切に救われたと感じている。フラを教えてくださいとクム、カルチャースクールの職員の方、飛行機が欠航になったときに助け合った女性、大介さん、玲子さん、ホノルルフェスティバルでボランティアに参加させていただいた時のチームの皆さま、出会った人々は数えきれないが、自分がフラへの情熱を持っていたからこそ、その情熱は人に伝わり、人を動かしたのではないかと考える。そのように自分が大切だと判断する出会いは、徹底的に大切にする一方、誘惑や自分に不必要な関係性は、失礼の無いような態度で距離を置くことの必要性も感じた。ただしその相手も絶対的に不必要な関係性だとすぐに断定しないことも重要であり、ずるい言い方をすれば「うまく利用する」ことも大切であった。また、初対面の人でも相手の意見を聞き出すには、自分の意見を伝えることで、相手は反発という形で本音を吐くこと、人との関係性を築くうえで大切なのは「低姿勢で、かつ積極的に。笑顔で真摯に向き合うこと」、などの気づきを得た。

今回の経験をどのように今後生かしていくか

「京大生フラダンサーになる」という目的に対し、「フラを愛し踊る者」として自分を“フラダンサー”として認めることができた点では、ある意味達成できたように思う。一方、フラを生業とし、ハワイの文化として自ら踊りを伝えていくという意味では、伝統の厳しさゆえに学業との両立は難しいと思い知らされ、痛感した（先生という生業としてフラを教えるにはクムに忠誠を誓って、ハワイに長期滞在してウニキという修行とテストを修了する必要がある。公民館やスポーツジム等でやっているフラは健康目的のツールであり、これを想定してはいない）。しかし、発信することは可能である。というのも、そもそもは自分の「フラダンサーになりたい」という自分本位の野望をかなえるために動いていたが、様々な活動を通して「ハワイの発信力」にかなり興味を持ち、自分の経験、学んだフラについてのみならず、何かを発信したいという強い気持ちを抱いた。そこで、ネクストアクションとして、おもろチャレンジ採択者の体験談をまとめて発信しようと考えている。おもろチャレンジで採択者が学んだことは何といても「おもろい」ものであり、京都大学の自由な学風を体現しているものである。私自身がハワイで出会う人皆に、おもろチャレンジに興味を持っていただいたことも大きい。今は何を媒体にして伝えるかな

ど、まだまだ計画段階であるが、そのように発信することでただの充実した3週間として終わらせないようにしたい。

主な奨学金の使途

*渡航費

*宿泊費 など

